もう一つの戦い

瀬谷区支部　金子　三好（妻）
戦没者　金子　清秀
戦没地　フィリピン

主人に召集令状が来ました。赤紙が来たというべきでしょうがそれは色つきの紙ではなかった。原稿用紙の裏面に召集令状の文面が印刷されたものでした。「僕のような者にまでこんな召集令状が来るということは日本はもう勝てないな」と夫がポツリと言った。

赤紙を作る用紙にも事欠く戦況だったのだろうか。

昭和十九年六月三十日夫は二十七歳で出征、妻、長男二歳十ヶ月、父五十五歳、母五十三歳と残された家族は父が住職であった長蓮寺で肩を寄せあって生きてきた。二十年二月二十四日次男誕生。主人に次男誕生のうれしいニュースも知らせるすべも無かったが二人の子供が元気に育ってくれるのが唯一の楽しみであった。戦火が激しくなり私達母子は近くの夫の実家の広田へ疎開した。

二十年八月富山市は空襲を受けた。疎開先は焼けなかったが近くの自分の家のある地域は空襲を受けた。家のある方角の空が桜が咲いたように一面に明るくなっていた。爆弾が落ちると明る

©2011_財団法人神奈川県遺族会

い空のあちこちにパッと火の光が見える。まるで花火を見ているような空だった。私達は明るい空をなす術もなく遠くから只々見つめていました。「ヒューンヒューンと耳をつんざくような音、そして超低空で飛行機が頭上を旋回しながらパラパラとトタン屋根に豆をまくような音で機銃掃射をした」と後で聞かされました。次の日、家のある富山市内に向かって歩いて帰る途中で富山から田舎に向かう人達に沢山すれ違いました。「富山は焼けてしまった」と言うだけで誰も多くを語らず通り過ぎて行きました。

家族は疎開先で終戦をむかえた。お寺だった私達の家はすべて焼け本堂などの柱二十八本が焼け残りとなって立っていた。父母が生きていてくれた事だけが喜びでした。焼け跡の片づけと住む場所を求めて八尾に帰り知人の大工さんの協力を得て焼け残った二十八本の柱を使ってバラックを建ててもらい母と子と老親の戦後の生活がはじまった。戦後を生きるためのもう一つの戦いのはじまりだった。

昭和二十一年春戦死の公報が届いた。でも母と子には夫の死を悲しんでいる時ではなかった。次男誕生後暫くして老父の死、そして二人の子供の成長を支えてくれた老母もその後病の人となった。

戦後、舞鶴港には外地からの復員船が何度も着いた。最後の復員船が着いた日の夜遅くまで起きていた長男が「やっぱり風の音だった。お父さんが帰ってきたのではなかった」としょんぼり家に入って来た姿が今も瞼の奥に残っている。

戦後は住む所にも食物にも不自由な社会状況だったので焼け残りの木で造ったバラックは親

©2011_財団法人神奈川県遺族会

子三代の住居としては貴重なものだった。庭先に畑を耕して子供達と野菜を作ったり、病気がちな老母を抱え一家の生活を支えるためには母は外で働かなければならなかった。

子供から少し手が離れたのをきっかけに県の教育委員会の仕事を手伝うようになった。病人を抱え医療費もかかり生活は大変だったが、近隣の人の配慮で休日は新聞の集金も手伝った。成長した子供達には小遣いは与えなかった。生活のために小遣いまで与える余裕がなかったと言うべきでしょうか。

戦後のないないづくしの生活の中ではどこの家でも子供が働くことは普通でしたが我が家もそれに違わず兄弟で新聞配達、納豆やあめ売りなど元気に活動していました。

そして私が最も忙しく働いていた時代は本業の他に休日は新聞の集金、そして料理の腕を買われて近所の食堂で夜の料理作りを頼まれ三つの仕事をした時期もありました。料理作りで夜が遅くなることを子供達に話し相談すると「病人と子供を抱えたおばさんに仕事を依頼する人などいない時代に料理の腕を買われたんだから手伝ってあげたら、家の事は僕達で何とかやるから」と頼もしい返事に励まされ、「よし、子供達のために強い母になろう」と思い精いっぱい働いてきました。

子供達にとって愛情をそそぎ育んでくれた祖母が寝たきりになった時のことでした。昼間の仕事を終え帰宅してからの洗濯や夕食の献立など考えながら急いで我が家の見える所まで帰りました。庭先の物干し竿にきれいにほされ風にひらひら翻っているおむつを見たとき胸をつかれました。寝たきりの祖母のおむつを兄弟で取替えそして洗濯をして干してくれていたのでした。「坊

©2011_財団法人神奈川県遺族会

や（兄）おつじゃ（弟）ありがとう」私は目頭が熱くなりおむつの翻るわが家に向かって手を合わせていました。母も子もお互いを思い遣り毎日を一生懸命生きてきたのが父亡き後の母と子の日々でした。

平和な時代に九十歳という高齢になり子供達と歩んだ日々を思う時、戦死した主人が一番あわれでなりません。主人は旅行好きな人でしたが旅を楽しむこともなく二十代の若さで異国の露と消えました。主人から二人の子宝をいただきがむしゃらに子育てをしてきた自分を振り返るとき何とも言えない嬉しい気分を味わえるものです。女は弱いものですが母となると違ってきます。母は子の為にはやる気が出てその気持は誰にも負けません。お蔭様で子供達も今は親となり「女親が一人で育ててくれたのだから負けてたまるか」の心意気旺盛でそれぞれの道を進んでいます。高齢となりあの戦争がなければ、主人が生存していれば私達の生活はと歩んで来た道にしみじみと思いをめぐらします。

高齢とは淋しいもので自身のこともやっとの日々です。二十代の若さで天国に逝った人の事を想います時、今少ししっかりして供養したいと願うばかりでございます。

©2011_財団法人神奈川県遺族会